

エゾバフンウニの棘抜け

エゾバフンウニは口の周りの一部を除いて細かい棘に覆われています。ところが、状態が悪くなると、この棘が抜けて体の一部、ないし全体の棘が抜け落ちてしまうことがあります。本稿では、エゾバフンウニの棘が抜ける要因のうち、甲殻類によって起こる例について紹介したいと思います。

○ウニ類の棘抜けとは？

エゾバフンウニに限らず、ウニ類は状態が悪くなると棘が抜けます。最もよく知られているのが、微生物（細菌）によって生じるもので、国内ではエゾバフンウニの斑点病やアカウニの棘抜け症という病気が知られています。また、国外でも世界各地で微生物によるとみられるウニ類の棘抜け症状が報告されています。これら多くの細菌病は複数の細菌種が関与し、日和見的に発生する病気であるとされ、「Bald sea urchin」（ハゲウニ）としてまとめられています（Becker ら 2008）。Bald sea urchin の場合には個体全域の棘抜けの他に、ウニ類の足である管足の付着力の低下や体表に「シミ」のような斑が生じることが多いです。

○棘抜けを引き起こすヨコエビ

細菌とは別にエゾバフンウニの棘を抜け落ちさせる生物としてテングノウニヤドリ属に分類される甲殻類が知られています（図1）。この生き物は端脚目テングヨコエビ科に属する甲殻類で、いわゆる「ヨコエビ」と言われる生物群の仲間です。テングノウニヤドリ属のヨコエビは4種が知られており、北海道ではエゾテングノウニヤドリ *Dactylopleustes yoshimurai* とナミテングノウニヤドリ *Dactylopleustes obsolescens* の2種の報告例があります。

これらのヨコエビはエゾバフンウニに棘抜けを発症させます（図2）。棘抜けした患部は、エゾバフンウニの体液が滲み出て黒紫色に変色します。過去には北海道東部の天然海域でも、これらのヨコエビによって脱棘したとみられるエゾバフンウニが多数見つかった例があり、エゾバフンウニがいるところには少なからず生息しているようです。

テングノウニヤドリ属のヨコエビが発生した水槽を観察してみると、エゾバフンウニの上だけでなく、水槽の壁面に定位していることもあります（図3）。このため、これらのヨコエビはエゾバフンウニの寄生生物という見方もできますが、どうやら離れてもすぐに死んでしまうわけではないようです。あるいは、エゾバフンウニの状態によっても取りついたり、取りつけなかったりするのかもしれない。



図1 テングノウニヤドリ属のヨコエビ



図2 「十円ハゲ」状に棘抜けが生じたエゾバフンウニとテングノウニヤドリ属のヨコエビ（赤い矢印部）

○陸上水槽での大発生とその対応

これらのヨコエビが大きな問題となるのは、飼育中のエゾバフンウニの水槽に大発生した場合です。ごく一部のエゾバフンウニからこれらのヨコエビが見つかる程度であれば、「十円ハゲ」が生じるようなことがあってもエゾバフンウニには大した影響はありません。しかし、棘の間々に大小のヨコエビが無数に見つかるような状態になると、細菌感染時のように体全体の棘が抜ける個体が現れ、死亡に至ることも珍しくありません(図4)。

一度大発生してしまうと、飼っているエゾバフンウニ全てからこれらのヨコエビを取り除くのは非常に困難です。比較的有効だったのは、エゾバフンウニを籠に入れて、水槽外の陸に1時間程度放置する方法です。一般に甲殻類は酸欠には非常に弱く、水が無ければもがいてど

ンドンエゾバフンウニから落ちていきます。一方、ウニ類は気温15℃、1時間程度であれば、陸に放置しても問題ありませんので、これらのヨコエビだけを効果的に取り除くことができます。



図3 水槽壁面にいるテングノウニヤドリ属のヨコエビ

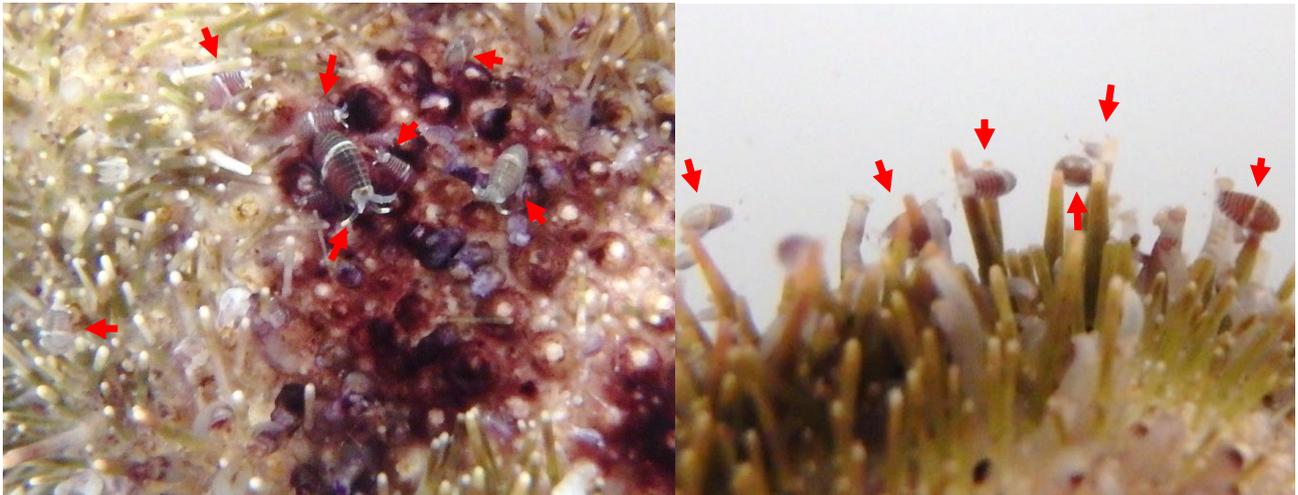


図4 エゾバフンウニの体表(上段左)や棘上(上段右)に発生した無数のテングノウニヤドリ属のヨコエビ(赤い矢印部)ともはや「焼け野原」と化されたエゾバフンウニ(下段)

